

在来野菜「外内島きゅうり」に用いた台木品種が果実品質および生育・収量に及ぼす影響

古野伸典・伊藤政憲*・板垣健太郎**

(山形県庄内総合支庁農業技術普及課産地研究室・*山形県農業総合研究センター園芸試験場・

**山形県庄内総合支庁産業経済企画課)

Effect of Rootstock Species on Growth and Yield of a Native Variety of Cucumber 'Tonojima'

Shinsuke FURUNO, Masanori ITO* and Kentaro ITAGAKI**

(Agricultural Technique Improvement Research Office, Agricultural Technique Popularization Division,

Yamagata Shonai Area General Branch Administration Office,

*Yamagata Integrated Agricultural Research Center Horticultural Experiment Station,

** Industrial and Economic Planning Division, Yamagata Shonai Area General Branch Administration Office)

1 はじめに

鶴岡市で栽培されている在来野菜「外内島きゅうり」は、露地での栽培が中心であり収穫期間が6~7月のほぼ1ヶ月間と非常に短いことが大きな問題となっている。特に、近年は漬物加工業者などの業務需要が拡大しており、実需者からは長期安定出荷が望まれている。

出荷時期の拡大のためには、従来の露地栽培にハウス栽培を組み合わせることが有効である。しかし、「外内島きゅうり」は、土壌病害に対する抵抗性が無く、接ぎ木栽培を行う必要があると考えられる。また、一般的なキュウリ品種と形態の特性や果実品質が異なるため、ハウス栽培に適した整枝方法の検討が必要である。そこで、「外内島きゅうり」に適した台木の選定と、ハウス栽培に適した整枝法について検討した。

2 試験方法

(1) 試験1：接ぎ木栽培が生育収量に及ぼす影響の検討

1) 試験区

台木に「FR ダントツ (ユウガオ)」、穂木に「外内島きゅうり」を用いたFR ダントツ区と、台木に「新土佐 (カボチャ)」、穂木に「外内島きゅうり」を用いた新土佐区を設け、対照として自根区を加えた3試験区で試験を実施した。

2) 栽培概要

接ぎ木を行った区の穂木は2月14日に、台木は2月15日に播種し、子葉片葉接ぎにより2月28日に接ぎ木した。自根区は2月21日に播種した。いずれの区とも3月23日にうね幅2.3m、株間0.4m、条間

0.45mの2条で雨よけハウスに定植した。基肥は窒素成分1.0kg/a、追肥は窒素成分で1.0kg/aを5回に分けて施用した。整枝は、親づる1本仕立てとし、子づるは2節で摘芯した。親づるの5節目までの果実は摘除し、それ以降、果重が70~80g/本となったものを6月23日まで収穫した。

(2) 試験2：ハウス栽培における整枝方法の違いが生育収量に及ぼす影響

1) 試験区

過去の研究成果から、「外内島きゅうり」は、側枝への着果が良好である傾向が見られたため、以下の試験区を設定した。

区名	整枝・誘引方法
子2本	2本仕立て。親づるを5節で摘心。2本の子づるを25節まで誘引。側枝は2節摘心
親+子	2本仕立て。親づると10節までで最も勢いのある子づるを1本づつ25節まで誘引。側枝は2節摘心
親1本1節	1本仕立て。親づるを25節まで誘引。側枝は1節摘心
親1本2節	1本仕立て。親づるを25節まで誘引。側枝は2節摘心

2) 栽培概要

2月21日に播種し、3月23日に定植した。1本仕立て区は試験1に準じて定植した。2本仕立て区はうね幅、株間は同じで、1条植えとした施肥量などは試験1に準じた。

3 試験結果及び考察

(1) 試験1：接ぎ木栽培が生育収量に及ぼす影響の検討

栽培期間を通した商品収量は、自根区に比べて、新土佐区では大きな差は見られず、一方、FRダントツ区では、A品収量、総収量ともに少なかった(表1)。FRダントツ区の収量が少なかった原因は、初期生育が劣ったことによると考えられた(表2)。これは接ぎ木の親和性に問題があったためと推察される。また、新土佐区の収穫終了時の生育は、自根区に比べてつる長に差は見られないものの、主枝葉数が多かった。このため、新土佐区に接ぎ木することにより、節間が短くなると考えられる(表2)。

(2) 試験2：ハウス栽培における整枝方法の違いが生育収量に及ぼす影響

栽培期間を通した収量は、親1本2節区が最も多く、次いで親1本1節区であった(表3)。A品収量の経時変化では、収穫前半はいずれの区ともほぼ同

等に推移したが、収穫終盤に親1本2節区で多くなった(図1)。親1本2節区の収量が多かった原因としては、上位節の2次側枝への着果が多かったことが考えられる。

一方、株間を広くして子づるを主枝として伸ばす設定の子2本区と親+子区では、子づるの伸びが悪く、収量も少なかった。また、親づるを5節で摘心した子2本区は、初期の生育が著しく劣った。これは、親づるの摘心により生長点がなくなったため、生育が停滞したことが原因と考えられる。

4 まとめ

在来野菜「外内島きゅうり」に適した台木は「新土佐」である。また、外内島きゅうりの施設栽培では、うね幅2.3m株間0.4mの場合、主枝1本仕立て、1次側枝、2次側枝ともに2節で摘心する方法が適すると考えられる。この場合のA品収量は520kg/a程度である。

表1 収量(試験1)

	A品収量		総収量	
	本数 (本/a)	収量 (kg/a)	本数 (本/a)	収量 (kg/a)
FRダントツ	6710	486	7570	560
新土佐	6890	520	8290	647
自根	7380	518	8970	649

表2 収穫始期および終了時の生育(試験1)(4/24, 6/26)8株調査

	収穫始期				収穫終了時		
	葉数 (枚)	つる長 (cm)	最大葉 葉長 葉柄 (cm) (cm)		主枝 葉数 (枚)	主枝 つる長 (cm)	葉幅 (cm)
FRダントツ	10.1	71	15.3	7.2	22.9	191	18.1
新土佐	14.3	100	17.5	10.5	25.3	200	19.5
自根	11.9	104	21.0	12.5	23.3	204	25.3

表3 収量(試験2)

	A品収量		総収量	
	本数 (本/a)	収量 (kg/a)	本数 (本/a)	収量 (kg/a)
子2本	6210	453	8020	610
親+子	5690	417	7230	548
親1本1節	6160	469	7850	632
親1本2節	7380	518	8970	649

表4 収穫始期および終了時の生育(試験2)(4/24, 6/26)8株調査

	収穫始期						収穫終了時		
	葉数 (枚)	つる長 (cm)	最大葉 葉長 葉柄 (cm) (cm)		主枝 葉数 (枚)	主枝 つる長 (cm)	葉幅 (cm)		
子2本	8.9	4.1	79	34	23.1	11.8	22.7	176	29.9
親+子	13.7	2.5	106	24	20.5	12.1	22.3	176	25.6
親1本1節	12.5	-	112	-	21.8	12.5	24.5	211	25.9
親1本2節	11.9	-	104	-	21.0	12.5	23.3	204	25.3

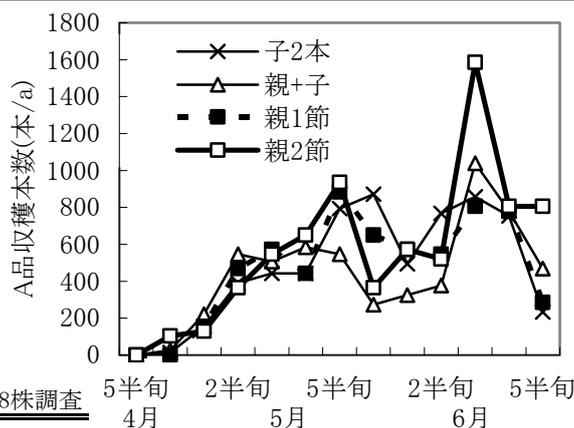


図1 A品収穫本数の経時変化【試験2】